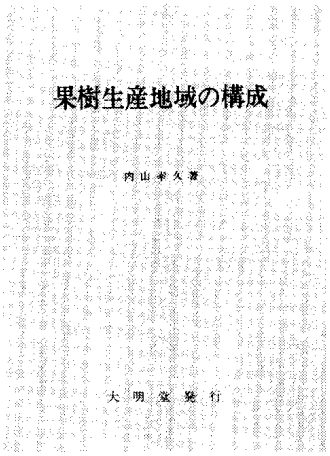
内山幸久著

『果樹生産地域の構成』

一九九六年三月発行　大明堂

A5判　二二五頁



野外実習に行った際、学生に地理学科の開設科目中もっともおもしろい授業は何かと尋ねると、高い割合で「農業地理学」や「産業地域論」という答えがかえってくる。いずれも地理学科教授の内山幸久先生の授業科目である。授業では、内山先生独特の語り口による調査等にともなう裏話や時事放談に花が咲いているようである。その内容は学生にとって新鮮であり、たまには授業そっちのけで真剣に話される姿が、たまらなく刺激的なのであろう。何事も、はっきりと物事を語る内山先生ならではのことである。そんな内山先生の著書が、一九九六年三月に大明堂より上梓された。簡単ではあるが、その内容を紹介させていただく。

本書は四つの章から構成されている。第Ⅰ章では、本書をまとめるにあたっての課題と目的を述べ、果樹生産地域に関する内外諸研究の動向を要約している。第Ⅱ章は、Carol・Philbrick・Boeschらによって提唱されてきた地域的機能単位の考えに基づく研究として、長野盆地のリンゴ生産地域と甲府盆地東部のブドウ・モモ生産地域を取り上げ、共同防除組合・共同出荷組合・共同灌水組合等の生産や出荷に伴う組織に着目し、その地域的な階層構成の違いを実証的に考察している。第Ⅲ章では、一九六〇年から一九八五年にいたるわが国果樹生産地域の分布パターンを明らかにした上で、長野県北部の小布施町・中野市、広島県因島市、香川県東部を事例地域として、各種果樹生産地域の形成過程とその地域的特徴を考察している。第Ⅳ章はまとめの章として、本書の各内容の結論部分を要約するとともに、内山先生自身の果樹生産地域研究が総括されている。

本書は、わが国地理学の伝統的考察方法の一つでもある、

現象の地域差と地域性の追及を根幹とする一貫した視点からまとめられている。なかでも、第Ⅱ章の機能地域の観点に基づく研究を、内山先生ご自身の理論的な立脚点に据え、第Ⅲ章での全国の果樹生産地域の分布パターンの変化を追及しながら、事例地域となる果樹生産地域の動向を実証的に考察する展開は、まさに伝統的地理学の王道であろう。私自身をはじめとして、後に続く研究者や学生にとっては、ぜひとも吸収しておきたい事柄である。なお、本書に掲載された内容の調査研究は、一九六〇年代後半から一九九〇年代はじめにかけて行なわれている。同時期はわが国の経済成長とともに、農村地域がもっとも大きな変貌を遂げた時期である。それゆえ、本書に掲載された土地利用図や図表には貴重なものが多い。

最後に、内山先生は長野市郊外でリンゴ生産を行なう兼業農家を実家に持つ。それだけに先生は無類の果物好きでもある。野外実習でご一緒させていただいた折に、上手にフルーツナイフで剥いてくださったリンゴをご馳走になりながら、長野盆地のリンゴ生産の話しを伺ったことを今でも鮮明に記憶している。すなわち、内山先生による果樹生産地域の研究は生来のものであり、先生そのものなのである。愛着をもって地域調査に臨み、論文としてまとめられたその内容には説得力がある。長い期間にわたる研究が結実し、著書として出版されたことを心からお祝い申し上げるとともに、各層に本書をご推薦申し上げたい。

（鈴木　厚志）